第9回小説現代長編新人賞受賞作

小旋風の夢絃（つむじかぜのむげん）

抄録

小島環 【画】スカイエマ

春秋末期の中国。
墳墓から不思議な琴を発見したことで、
少年の運命は変わった。

序章　三皇の琴

1

衛国は、武王の弟である康叔を始祖とする。

殷朝を滅ぼし、周朝を興した武王が、康叔に「殷の地と遺民を治めよ」と命じたからだ。

殷の首都であった朝歌は衛の首都となり、太行山脈という天然の長城を有して、三百年にわたって繁栄を誇った。

しかし、百二十五年前、北狄の侵略により国境線が後退すると、首都を曹に移さねばならなくなった。

以後、衛国は弱り続け、庶民は代がかわるたびに貧しくなった。かつて平原で最も輝いていた朝歌の都も、すっかり寂れた。

だが、地下には黄金期を過ごした王侯貴族が、豪華な陪葬品と共に眠っている。

それも、数千もの丘の数だけ。

白の布衣を着た小旋風は、鍬と松明を手に、両肩がなんとか触れずにすむ横穴を、大きくもない体を縮めて進んだ。

緩やかな坂は、星のない夜よりも暗い。自分さえ見えず、風も音も、匂いもない。

生き物の気配がないところで、柔らかくてしまりの悪い黄土だけが、ときおり小旋風の頭をそっと撫でる。

歩むごとに寒さが増すが、穴の重苦しさのほうが小旋風を震えさせた。松明を引寄せる。小さな炎だが温かい。指に息を吹きかけた。

瞬間、肘が、土壁にぶつかった。

土が剝がれる。息を呑んだ。視線を回して、耳を澄ませる。

静かだ。

穴の奥を照らすが、果ては見えない。

「驚かせるんじゃねぇぞ、軟弱な横穴め」
悪態で己を奮いたたせるが、本当は一歩も進みたくない。
地盤の緩い横穴は、たやすく崩れる。人など、あっという間に肉餅に変わる。
俺は絶対、生き延びる――小旋風は慎重に、小鳥を撫でる軽やかさで踏み出した。
足裏に土の感触を覚えたと同時に、轟音が小旋風を襲った。爆風に吹き飛ばされる。鞠のように穴を弾んだ。
「とうとう死んだかあ、小旋風」
養父の濁声に、散らばっていた意識が集まった。
小旋風はぼんやりと瞼を開いた。
松明は消え、何も見えない。巾が緩み、髪が顔にかかっている。土煙で目鼻口が痛むが、刺激のおかげで生きていると悟った。
けれど、手足の感覚がない。
芋虫の仲間いりか。腹這いで蠢き、赤子のように暮らす姿を想像して、小便が漏れそうになった。
むりやり心を落ちつけて、小旋風は望みをかけて手足を動かした。
痺れているが、指先まで動いた。
何度も指を曲げれば感覚が戻った。あちこちぶつけたところも痛みだしたが、それでも歓喜で涙が溢れた。
「天阿！　俺はやめるぞ、猪児爸爸。こんな生きかた、やってらんねぇ！」
仰向けのまま叫べば、松明を手にした養父が、巨体で土壁を削りながら駆けてきた。
「生きてやがったか。運のいい奴め」
明かりが近づくにつれ、横穴のありさまが浮かびあがる。
坑道の天井が崩れ、砂礫で塞がれていた。あとわずかでも進めば、小旋風も潰れていた。
九死に一生を得たと幸運に感謝できるほど、小旋風はおめでたい性格ではなかった。
「稼業は今日限りだ。二度とやらねぇ！」
「まあた、やめる、が始まったか。おまえほど、稼業にむいてる奴はいねえのに」
猪児の肉厚な手が横穴に転がる鍬を拾い、小旋風を起こした。布衣の土を落として小旋風の手足を確かめると、頭を乱暴に撫でる。
小旋風は荒々しい愛撫をふり払った。
「背丈が童子だからって、童子扱いは止めてくれ。俺は、もう十五だぞ」
「そんなに経ったか？　拾ったばかりと思っていたが……そういやおまえに懐いていた悪童どもも、今じゃあ所帯を持っているもんなあ。まぁ、でもよ、土塊にも劣るおいらたちが

人並みになるには、おまえが必要だ。いつまでも、小さいままでいてくれや」
朗らかな声に、小旋風は言葉を被せた。
「永遠に、童子のままでいろってか？　そりゃあ無理な話だし、鉋で命を削るみてぇな生きかた、土塊から人になる前に死んじまうよ」
「そんなら、ほかにどんな生きかたがある？」
小旋風は口を開こうとしたが、穴の外から、義姉の耳耳の声が響いてきた。
「父様、小旋風が動けるのなら、先へと進ませてください！」
「冗談だろ、耳耳姐姐！　爸爸の肉壁で見えねぇか？　先は塞がっちまったよ」
「音が響いております。間違いなく、奥が通じました！」
猪児が素早く松明を掲げ、土砂を照らした。
小旋風は絶句した。崩落した天井近くに、童子の肩幅ほどの隙間がある。
「とうとう宝を見つけたみてぇだなあ。さぁ、小旋風、出番だぞ。とっとと行ってこい！」
猪児が、小旋風の肩を強く叩いた。
小旋風は困惑の表情を作って、小首をこくんと傾げた。
「俺の聞き違いだと思うがさ……この地盤は緩くて、また落盤するかもしれねぇよな？」
輝く米粒のような入り口に視線をむければ、猪児に肩を押されて尻もちをついた。
「崩落する前に、宝をみつけろ。おまえは勘が良くって動きも速え、運悪く死んだ奴らとは違って経験もたっぷりだ、心配ねえさ」
安請けあいに、小旋風は拳を握った。
猪児の養子になってから、幾人もの義兄弟を喪った。義理とはいえ、家族のように育った者の死を、猪児は「運が悪かった」の一言ですませる。
「それに、小旋風のほかに、誰があそこを抜けられる？」
猪児がわざとらしく腹を叩いて、人の悪い笑みを浮かべた。
この豚野郎――小旋風は奥歯を噛みしめた。
脱出したいが猪児が阻んでいる。力の差は明らかだ。説得するしか術はないが、隙間を確かめるのとでは、どちらが速いか。
小旋風は、心中で世のすべてを罵倒すると、髪をきっちり束ねなおした。湿った土砂に登り、松明を割目に差し入れる。
先に触れるものはない。
「死んだら祟るぜ。冥界の亡者を山ほど連れて帰ってやる」
「祟りが怖くて墓が暴けるかよ。生まれてからこの土地で、数えきれねえ墳墓を掘り返してきたが、幽鬼が出てきたためしはねえ」

猪児があっけらかんと答えて、小旋風を穴に押し入れた。
確かに、いるかわからない幽鬼より、目の前の現実のほうが恐ろしい。
盗掘は、死と隣りあわせだ。圧死、生き埋め、餓死、窒息死と、死の種類は賭けにできるほど豊富にある。
「盗掘者に、良心なんかあるわけなかったな」
吐き捨てれば、猪児が鼻を鳴らした。
「死んだとしても儲けもんだろ。おいらたちじゃあ一生ずーっと働いても、王侯貴族様のような墓にゃ、埋葬してもらえねえんだ」
猪児は冗談めかしているが、小旋風は笑えなかった。
「命を削って働いても、俺たちは一生、土塊以下か。どんな貴人様だって、一代目はみんな成りあがりだろ。そんなら、俺も……」
生きて墳墓から出たら、今度こそ盗掘稼業から足を洗うと決意して、小旋風は土砂の間に頭を入れた。
松明を手に、氷のような礫の間を、体を攀じり、捻って、這った。
華奢な小旋風は穴の探索にうってつけだ。穴を大きく掘らずにすむから地盤の強さが保たれ、崩落の危険性がぐっと下がる。
それに、同じ背丈の童子よりも小旋風には経験がある。宝の目利きもできる。幼い頃から、死にたくない一心で技を磨いてきた。
「けどよ、俺らは買いかえできる、安い道具じゃねぇんだぞ」
声に出さずに猪児をなじる。小旋風が死んでも、代わりの子供がやってくるだけだ。
隙間はどこまで続いているのか。腕が伸びる限界まで、松明で照らした。
土の色が、黒みがかった赤に変わっている。亀裂の入った石壁が見えた。這い出したくなる心を抑える。力を入れて抜けようとすれば、土砂の調和が崩れて、今度こそ肉餅だ。
小旋風は石壁の隙間から肩を出した。
暗くて奥まで見えないが、床壁がある。床は水平で、壁は垂直に立っていた。縦横ともに三丈くらいの広さで、ほぼ正方形だ。小旋風と猪児と耳耳が、大の字になって寝ても余裕がある。
対盗掘用の罠に注意しながら、小旋風は床に転がり降りた。
「爸爸、間違いない、玄室（墓室）だ！」
「隅々まで、よーく探せ。失望させんじゃねえぞ」
土砂の間から鍬を受けとり、小旋風は改めて空間を照らした。
玄室の中央には、棺槨らしきものが置かれていた。肝心の陪葬品は見当たらない。

しかし、落胆はしなかった。
小旋風は罠に警戒しながら棺槨に近づき、室の中央から真上を見た。
天井には、銀河があった。一面に埋めこまれた無数の宝石が、煌めく星空を描いている。
貴石の価値は凄まじい。金額を試算するだけで目眩がした。これだけあれば、商売の元手にできる。新しい人生をはじめられる。
小旋風は鍬をふりあげた。爪先で立っても、飛んでも、天井の宝石には届かなかった。
「死んでるくせに、宝は手放さねぇわけか。なんて野郎だ、忌々しい。さぞかし根性曲がりの捻くれ者だったんだろうなぁ！」
削り取るには足場が必要だ。竹と紐さえあれば小旋風だけでも組み立てられるが、材料を運び入れて足掛かりを完成させる前に、横穴が崩れるほうが早そうだ。
そうなれば、小旋風は玄室に生き埋めとなる。
玄室を覆う土を、すっかり除けば崩落はしないが、地中の深さを考えれば時間も費用も莫大だ。猪児の懐では賄えない。
棺槨の主は盗掘を嫌って、あえて脆い地質を選び、墓を築いたに違いない。
「獲物は見えるか？　どうなんだ、小旋風！」
猪児が宝石を知ったらどうするか、考えるまでもなかった。幸い隙間は小さく、なにもないと告げれば、確認できないはずだ。
金は欲しいが、命が惜しい。落盤の危険に怯えるくらいなら、別の墓を暴けばいい。
「棺はあるが、持ち出せそうな獲物はない！」
腹立ちまぎれに棺槨を蹴った。五百年も前に死んだ棺槨の主に、小旋風たちはまんまと踊らされた。
「しっかり探せ、金持ちになりてぇだろ！」
早く戻れば怪しまれる。小旋風は棺槨についた足跡に触れた。白膏泥で覆われた棺槨は、痛いくらいに冷えている。
「ああ、そうだな、爸爸。金だけは俺を裏切らねぇ。見落とさねえように探してみらぁ」
足裏に伝わった振動で、何かが納めてあるとは知れた。銀河の玄室に眠る人物だ。たっぷり宝を抱えているかもしれない。
小旋風はさっそく鍬で棺の泥を削った。泥の下には、木炭が敷き詰められていた。蹴り落とせば、竹の蓆が幾重も現れた。
「勿体ぶんなよ。根性曲がりのあんたが、死んでも離さなかった遺品だもんなぁ」
浅黄色の竹蓆を引っぺがすと、石棺が現れた。体は汗まみれだ。肩で息をしながら棺の蓋に手をかける。動かない。今さら諦められるかと、渾身の力で蓋を押した。
わずかに動いたと思った瞬間、蓋が一気に外れた。

勢いのまま、小旋風は棺に頭を突っこんだ。顔面は死体の胸部にぶつかったが、ほどよい弾力があって痛みはなかった。

それでも、死者に触れた気持ちの悪さに、すぐに身を離して、改めて棺の中を見た。

少女が眠っていた。それも、かすかな寝息を立てて。

体から力が抜けた。小旋風は棺槨によりかかるように縋り、目だけで少女を確かめた。

生きているはずがない。でも、生きているように見える。

混乱した頭は息の吸いかたを忘れた。打ち揚げられた魚のように唇を動かす。苦しい。頭が痛い。気が変になりそうだが真実を知るべく、少女の口元に震える指を伸ばした。

「しっ、……死んでるのか？」

返事はない。指先に呼気も感じない。ならば、吐息は幻聴か。

死体は瑞々しく、今にも目を覚ましそうだ。艶のある髪、化粧の施された顔は完璧に保たれ、肌には潤いがあり、吐息が聞こえても不思議ではないと思わせる。

「はっ、はは っ！　根性曲がりの捻くれ者は、死んでも、死にたくなかったわけか」

小旋風は少女の執念に舌を巻いた。恐ろしさもあったが、少女の意志の強さに興奮した。

地中深くになるほど気温は下がり、玄室のものは腐らない。そのうえで、石棺を白膏泥と木炭、蓆で密封して、乾燥や浸食から防いだ。

王侯貴族の墳墓ならどれでも、死者の復活を願って腐らないように工夫がしてある。だが、うまくいっても干からびているか、溶けかけているかして、一見して骸とわかる。

生きていると見紛うほどの骸など、嘘くさい伝説でしか聞いた覚えがなかった。

「あんた、そんなに腐って消えるのが嫌だったのか？　良い根性だな、おもしれぇ」

少女の柔らかさが、今も顔に残っている。見たところ、胸は崩れてはいない。これまで、女の乳房に触れる機会はなかった。小旋風は喉を鳴らした。

棺の主は十代半ばだろうか。うっすらと笑みを作った唇は可憐で、左目の下にある小さな黒子が妙な色気を感じさせた。無邪気さと妖艶さ、相反する魅力が混じりあって、見れば見るほど視線が逸らせなくなった。

「あんたが欲しいな。……死んでんのにな」

王侯貴族の古墓群に眠る女だ。誇り高い女のはずだ。貧しい賤民など相手にしない。触れようとすれば鋭い視線で睨みつけて、小旋風を拒むはずだ。

生きてさえいれば。

「やっちまっても、嫌はねぇよな」

陵辱しても、拒絶はされない。小旋風は勇気を出して、少女の唇を吸った。

冷たさと、思いがけない柔らかさに、びっくりして棺から飛び退いた。唇に触れれば指に紅がついた。とたんに罪悪感を覚え、消えたくなった。

「やっぱ、……惚れた女は傷つけられね

ぇわ。あーあ、生きてるうちに出会いたかったなぁ。そんでも、あんたが死んでなかったら、絶対に会えなかったけど」

少女の顎を撫でながら、小旋風は棺の蓋を閉じると決めた。

盗掘者に見つかれば、珍しい骸は不老長寿の龍骨として売りさばかれる。骸を売った利益を想像はしてみたが、恋心と一緒に少女を完全なまま、棺にしまっておきたいと思った。

「もう、邪魔しねぇよ。ゆっくり眠ってくれ」

蓋を押し戻そうと立ちあがる。

ふと、小女の脇にある、細長の革袋に気づいた。

瞬間、恋などという甘い幻想は吹き飛んだ。生きた死体が、ひとつだけ持っていた陪葬品だ。盗掘者としての性が、革袋の中にとんでもないお宝があると訴える。

小旋風は躊躇せずに死者を退かせて革袋を奪うと、手早く中身を出した。

「なんだこりゃあ、……板か？」

何度瞬きしても、漆塗りの板だ。幅は八寸ほどの長方形で、立てれば小旋風の鼻先まで高さがあり、横は、肩幅と同じくらいだ。

少女と同様に状態は良い。木製品は、経過年数が多いほど味わいがでるが、湿気に弱く、地中で三年もすれば腐りはじめる。

しかし、古いとはいえ、木だ。貴石や青銅でなければ、骨董商の提示額は期待できない。

盗掘稼業に携わり、嗅覚が養われたと思っていたが、とんだ肩すかしだ。小旋風は天を仰いだが、視界に飛びこんできた銀河の光彩を見て、思いなおした。

改めて、板を松明でじっくり照らして、小旋風は息を呑んだ。細かな金銀象嵌で、幾何学模様が描かれている。装飾は両側にもあり、線に誘われて板を裏返した。

表面上部に張られた五絃で、楽器だと気づいた。裕福な好事家が嗜む琴に似ているが、記憶よりも二絃、足りていない。

少女の寝息と感じた音は、棺に突っこんだ衝撃で、絃が震えたからなのだろう。幾分か冷静さを取り戻し、少女に触れた時よりも優しく、絃をはじいた。

ぴんと張った絹糸は想像より硬かったが、音は柔らかく玄室に響き、静寂の中に溶けた。

心地良さに、小旋風は姿勢を正すと瞼を閉じて、今度は力をこめて絃を弾いた。

瞼の裏に、琴に描かれた幾何学模様が、大銀河のように浮かんだ。琴韻に誘われるまま宇宙を漂い、星々の輝きに酔い痴れる。

体は混沌に溶け、意識が消えた。

小旋風は大宇宙の一部となり、大宇宙が小旋風の一部となった。

振動が消えゆくにつれ、小旋風の意識は薄暗い玄室に戻った。

見上げれば、天井に星雲が輝いており、見下ろせば、琴に無限の宇宙を感じた。

再び絃に指をかけたが、弾くのは躊躇われた。小旋風には楽の教養がなく、琴の能力を活かしきれない。

「俺ごときにはもったいねえ。でも、持

ち主は死んでいる。まさに宝の持ち腐れ……そうか、琴よ、俺を呼んだな」
胸が、灼熱の野心で満たされた。木製品は、発見時には腐るか壊れるかだ。かろうじて形を保っていても、本来の音色は響かない。
「爸爸、こりゃあ、とんでもねぇお宝だ！」
琴を素早く革袋に入れると、小旋風は意気揚々と穴に差し入れた。
「なんだぁ、この軽さなら、……木でできてるな。売り物になるのか？」
猪児が琴を受け取った。小旋風は石室の隙間に潜りこんだ。心が逸る。あとは地上に出るだけだ。
「説明は後でするさ。さぁ、猪児爸爸、手を引いてくれ」
小旋風は腕を伸ばして、手を振った。
横穴に這い出るには時間がかかる。猪児側から引けば一瞬だ。宝は手にした。玄室に戻る必要はない。小旋風が通った振動で、土砂の隙間が塞がっても問題はない。
「おいらは、お宝はどこだと訊いてんだ！」
猪児は手を取らず、叱責で小旋風を叩いた。
「宝なら、ほら、渡したろ。中身は、琴だ。それですべてだ」
「楽器なら、青銅でなけりゃ価値がねえと教えたはずだ。お宝はどこだ！　土も降ってきやがるし、おまえを引けば、横穴がすべて崩れちまうかもしれねえ。わかるだろ？」
横穴の壁を擦って、猪児が背をむけた。
小旋風は、猪児の台詞を三度、脳裏でくり返した。
経験豊富な猪児が土を気にした。穴はまもなく、確実に崩落する。
宝は素直に託したのに、小旋風を疑い、脅すのか。現実は受け止めたが、心は猪児の言葉で潰れた。爸爸と呼んできた男だが、孤児を拾って盗掘稼業の道具にしている悪人だ。
信じたり、頼ったり、ましてや命を預けるなど、愚かだった。
舌に渾身の想いをこめ、小旋風は猪児に呼びかけた。
「爸爸！　その琴は無限の可能性を秘めている。俺は、金銀宝石よりも高く売る、とんでもねぇ方法を思いついた」
壁を擦る音が止まった。
小旋風は勢いよくたたみかける。
「これは、とんでもねぇ儲け話だぜ。俺たちゃ、もう二度と地下を這い回らずにすむ！」
「……いったい、どんなやりかただ」
小旋風の誘い文句は、猪児に死の危険を少しだけ忘れさせたようだ。
腕を振る。猪児が舌打ちをして、小旋風の手を掴んだ。身を砂礫に擦られながら、二尺の隙間を一気に滑り出た。
「さあ教えろ！　古びた琴を、どうやって金銀宝石より高く売る」
猪児が革袋を乱雑に抱えていたので、小旋風はすぐに奪い返した。
土塊が豪雨のように降っているが、猪児は道を塞いだまま一歩も動かない構えだ。

「俺の舌を使う。俺に琴を売らせてくれりゃあ、爸爸が売るより高値がつくぜ」
答えた途端、猪児の拳が飛んできた。
「くっそお、また騙された！　よくよく口の巧い奴だ。おかげでおまえは命拾いか」
血の味が口に広がり、小旋風は頬を押さえた。猪児を笑おうとしたが、傷が疼いて眉をひそめた。
「おまえを引っこ抜いたせいで、ここはもうすぐ潰れっぞ」
どうしてくれると凄まれたが、今にも崩れそうな横穴のほうが恐ろしい。
「俺のせいだって言いたいわけか？　まぁ、そうだな、爸爸にとっちゃあ養子なんて、欲を満たすための道具でしかねぇもんなぁ」
鬱憤を吐き出して、小旋風は出口を指した。
「道具だとお？　おいらを、そんな男だと思っていたのか！」
猪児が忌々しげに吐き捨て、小旋風を一睨みして駆けだした。
「違うってんなら、どんな男だか言ってみろ。言えるもんならな！」
猪児に続いて、小旋風も脱出口を目指す。だが、猪児の足が遅い。巨体が穴の横幅に詰まっているので、追い抜けない。
もどかしさに猪児の背を思いっきり押せば、ぴたりと立ち止まった。
「おいらは、そんな父親か？」
小旋風は「天阿！」と叫び、猪児を力いっぱい叩いた。
「心中する気か、ふざけんな！」
死が、口を開けて迫る。今度こそ漏らしそうだ。小旋風は全力で体当たりをする。けれど、猪児はびくともしない。
「大儲けしてみせる、嘘じゃねぇな？」
「俺の舌にかけて二言はねえよ！」
とたん、猪児が俊敏な動きで小旋風の腕を取り、股下から体を入れ替えた。
「だったら走れ。決して後ろをふり返らず、小旋風の如く！」
小旋風は光り射す出口を目指して、ただひたすらに駆けた。

2

横穴からとび出すと、七月半ばの陽気が小旋風を懐深く包んだ。
雲のない、透き通るような空だ。数十里離れた朝歌から、襄公九年（紀元前五三五）の正午を知らせる鐘音が響く。
街道を辿り視線を下ろせば、小高い丘の並ぶ小丘地帯の間に、盗掘村がある。
お世辞にも、豊かとは言えない村だ。
しかし、一攫千金を狙える場所だ。
家の屋根を確かめて、小旋風はようやく緊張から解き放たれた。
「どけ、小旋風、邪魔だ！」
死地から戻った小旋風を、思いっきり突き飛ばした女は、義姉の耳耳だ。
少しだけ年上で、幼い頃からともに育った。汚れた麻の布衣で細身の体を包んでいるが、瞳は鋭く刃のようで、うかつに接すれば傷つけられるのは小旋風だ。
なぜ怒鳴られたのかと、転がったまま呆然とする小旋風に舌打ちをして、耳耳

が叫んだ。
「父様、早くっ！」
悲痛な叫びが終わらないうちに、穴から轟音が響いた。
続いて、土煙が入道雲のように噴き出した。
小旋風の頭の中も土煙色に染まった。急いで穴の口に駆け寄る。
横穴は、土砂で完全に塞がれていた。
「な、なあ、耳耳姐姐には聞こえたはずだろ、……教えてくれよ、どうなった？」
目の前の光景を見れば明らかだ。それでも問わずにはいられなかった。
「潰れたよ」
隣で立ち尽くす耳耳を見あげる。血の気を失った横顔に、小旋風の足から力が抜けた。
「養父が死んだからには、俺らが盗掘を続ける理由は、もうねぇな」
盗掘稼業は楽ではない。めぼしい丘を見つけたら、穴を掘らねばならない。
汗にまみれ、血肉刺を作り、数ヵ月をかけて掘り進めた横穴を、墓にぶち当たらないからという理由で放棄し、また別の穴を——という事態になるほうが多い。
かつての華々しい朝歌を体感できる者は、当たりを引きあてた者だけだ。
それでも、村人の多くは貧しい生活を送りながら、お宝を夢見ている。
小旋風も盗掘村の野心家と同じく、成功を望む男だ。けれど、盗掘稼業を望んだわけではない。盗掘を生業にする猪児が、孤児を拾って労働力としたから、墓を掘りかえしてきただけだ。
「おまえが初めて王墓に入ったのは、齢五の春だった。以来ずっと盗掘稼業だ。墓を掘るほかに何ができると？」
「姐姐に耳があるように、俺には舌がある」
小旋風と耳耳は養子の中で、たった二人だけ生き残った。特技を磨いて猪児の気にいりとなり、最後まで死から逃げきった。
ようやく、自由だ。
「舌先だけで世が渡れるものか。村に戻るぞ。長老に話をして、父様の墓を作らねば」
「必要ねぇよ。王侯貴族の墓で死ねるんなら、儲けもんって言ってたぜ」
耳耳は小旋風を一瞥すると、背をむけた。
「私は、猪児父様を尊敬していた。父様は私より、小旋風を好んでいたがな」
小旋風は耳を疑い、耳耳の足首を掴んだ。
「嫌がる俺を、穴に押しこんだのは誰だ？　俺が前を走らなければ、爸爸と一緒に潰れてた」
「だからこそ、おまえを先に行かせた父様の心は……」
小旋風は耳耳の言葉を遮った。
「姐姐は、泥棒が獲物を落とせば、返してくれたと感謝するのか？　殺人鬼が刃を納めたら、助けてくれたと感謝するのか？　爸爸は俺らを都合よく使ってた。さっきは助かるみこみのある俺を、殺さなかっただけだ！」

耳耳が顔をしかめて、人より大きな耳をおさえた。つられて、小旋風も己の耳に触れた。耳耳と同じ玉（翡翠）の飾りがついている。

石の冷たさに心が醒める。どちらも玉製だが、小旋風のほうが緑色が濃くて、透明度が高い耳飾りだ。

それで、小旋風のほうが愛されていたと、思いこんでいるのかもしれない。

だが、猪児は気まぐれな男だった。耳飾りは養子の証でしかない。むしろ、耳耳のほうが大切にされていたから、横穴にはいつも小旋風が入らされた。

「おまえはいつも、口先で人を言いくるめるのが得意だな」

あきれたような物言いだが、小旋風は気にせず同意した。

「俺は、口でしか人に勝てねぇもん。だから、舌を武器に、大儲けするんだ」

「……身のほどを知れ。私は先に帰るから、しっかり頭を冷やせ」

耳耳の姿が見えなくなっても、小旋風は琴を抱えて蹲っていた。

「俺は、この琴で、大儲けするんだろ」

墳墓から出られたら、猪児から解放されたら、望む場所で、好きに生きると決めていた。ところが、思いがけずその時がきても、小旋風は動けなかった。

今までだって、とび出す機会は何度もあった。それでも、盗掘村に留まった。理由はわかっている。

独りになるのが怖い。自分の力だけでやっていけるか保証などないから、一歩が踏み出せない。

「みぃーつけた」

風に乗ってきた声に、小旋風は顔をあげた。

揺れる草の間に、女が立っていた。髪は全くの白髪で、腰のあたりまで乱れるに任せている。

老婆かと思ったが、違う。襤褸布の下に、つんと上をむく胸の膨らみがある。衿の合わせ目から覗く青白い肌が、墓から出てきた亡者を彷彿とさせた。

幽鬼が祟りに現れたのか――墳墓の中に引き戻されたような寒気がした。

力の抜けた足腰を叱咤して、小旋風は尻だけで後ずさった。

女が両腕を広げて、近づいてくる。顔面を覆う白髪の奥から、碧眼が覗いた。内臓が一気に縮むが、目が逸らせない。見覚えのない色だ。掌が疼いた。

十年にわたり命がけで一攫千金を求め、盗掘をしてきた小旋風には、鍬で穿った振動で地中に墓があるかわかる。

珍しさは、人の欲を刺激する。夢をみているような白髪女の碧眼にも、暴きたいと思わせる魅力があった。

脳裏で警鐘が鳴る。好奇心を散らそうと小旋風は利き手を振り、素早く立った。

「あんた、誰だ。俺に、なんか用か？」

言葉を投げるが返事はない。白髪の女の歩調が早まり、距離だけが縮む。

幽鬼か、それとも心を病んだ浮浪者か。幽鬼の類なら、墳墓を荒らしまわった小旋風を、けっして許しはしないだろう。

猪児の姿が頭をよぎった。小旋風は盗

掘村を見下ろして、軽く首を振った。
「俺は、生きて、金持ちになるんだ！」
ぎゅっと琴を抱きしめて、盗掘村とは真逆に駆けだした。

第一章　嵐の起こしかた

1

丘を下り、河水（黄河）を越え、小旋風は百六十里をまる二日で駆けた。
夜明けの鐘が、白みはじめた空に鳴り響く。始まりの音だ。華々しい未来を期待して、小旋風は帝丘都城を見上げた。
都をすっかり囲む城壁は仰け反るほどに高く、左右の端が霞むほどに延びている。
帝丘は衛国の首都、河水中下流域における南北の要衝だ。中原の要として、兵法では第一に押さえるべき地とされる。
ゆえに、強固な城壁を築いているが、城壁上の角楼には旅人の顔を上げさせる魅力がある。小国でありながら、芸術の発信地と評されるにふさわしい彩色が施されていた。
城門を潜ると、街路は朝餉を求める人で溢れていた。帝丘都城の住民は、五万を超える。その胃袋を誘おうと、蒸籠から噴きあがる湯気に、肉や魚の焼ける音と香りが、あちこちから漂っていた。
「咕噜」と腹の虫が喚いた。小旋風の腹ではない。音の主には心当たりがあったが、無視をすると決めていた。
けれども、空腹なのは小旋風も同じだ。
道中ずっと、誰のせいで休息がとれなかったかと思い返せば、遠慮のない音に苛立ちが破裂して、小旋風は背後をふり返った。
「だから、俺を追いかけるのはやめ……っ！」
想像よりも間近に、白髪の女が迫っていた。通行人の視線で、他人にも姿が見えるとわかったが、誰しも見えないふりをする。
助けを求めても無駄だ。
都城の大門から通じる大通りを、小旋風は市場の手前で逸れた。太鼓橋を二度越えれば、華やかな一画が現れた。石畳が艶やかな路地に、長い塀を備えた大邸宅が並んでいる。
かつては葦の生えた湿地帯で、都城のどこよりも陰鬱とした場所だったが、埋め立てによる整地で変貌を遂げた。一代、あるいは二代で急に裕福になった者が、帝丘都城の内側に屋敷を持つという名誉をこぞって買い求めたため、数年で高級住宅街となった。
弩弓をそなえた見張り塔と、厳めしい門を持つ屋敷に目をとめて、小旋風は射殺される前に、顔見知りの門番に大声で告げた。
「石頭老師にお目通りを。妙な女に追われてますが、知りあいではありません！」
塀のうちに飛びこめば、同じような倉庫が左右に構えている。奥にある内門を潜れば、大きな母屋が現れた。銀色に輝

く屋根瓦が眩しい。息を整えながら、首だけで背後をふり返る。白髪の女はいない。門番が防いだか。

あの女は、何者だ。幽鬼でないなら、小旋風を追うわけはなんだ。考えながら布衣の汚れを落としていけば、母屋から使用人が出てきて、指先で「行け」と命じられた。

使用人に頭を下げてから、小旋風は母屋の傍らにある回廊へと進んだ。

回廊からは中庭が見廻せる。白色の奇岩と、満開の蓮池が望める庭園は、仙界を模していた。

都会の中で、人為的に作られた庭園には、ある意味で自然を超える美しさがあり、刻々と変化するという点において、いかなる彩画をも凌駕する。

時を経たものだけが持つ独特の趣は、人には作れないからこそ価値がある——小旋風に、美の基準を教えた老人は、蓮池のほとりの庵室で几案に座し、墨丸をすり潰していた。

老人の周りには緑松石を塡めこんで複雑な文様を表した壁飾りや、黄金の仮面、彩色を施された陶俑（陶器の人形）に、小旋風が発掘した虎の大きさほどの獣足鼎など、厳選された品々が並んでいた。

各時代の名匠が作りあげた渾身の逸品を、ひとつの空間で眺められるという贅沢に、小旋風はしばし陶酔してから、礼儀に厳しい老人の好み通りに拝礼した。

「お久しぶりです、石頭老師。今日は事情があり、俺がひとりで参上いたしやした」

老人は沈黙したまま、墨丸をする手を止めない。やはり、石だ。小旋風は苦笑した。

爺の名は、郭石平。もとは衛国の役人で、朝歌では寓望に任じられていた。

寓望は、関所で旅人を望見して不審者を取り締まる役人だ。融通のきかない性格で「石頭の酷吏」と評判だったらしいが、小旋風が生まれる前に官位を退き、私財をつぎこんで骨董蒐集をはじめた。

朝歌から帝丘まで駆けてきた心身は、消耗している。交渉をしたいが、我慢のできない童とは思われたくはない。十歳になる前から、猪児の背中越しに見てきた取引相手だ。何を好み、嫌うかは知っている。

小旋風は心を鎮めて琴を抱きなおし、交渉相手を値踏みして待つとした。

鶏羽で飾られた冠と、古典柄をあしらった絅の深衣には、骨董蒐集家にふさわしい品がある。しかし、薄くなった白髪、張りを失った皮膚、垂れた三重顎は醜かった。

かつては、磨かれた玉に似た威厳があったのにと、なぜだかとても悲しくなった。

「おまえの養父は、頭まで胃袋でできておる豚だからな。小旋風でことは足りる。それで、何を持ってきた」

墨丸を粉に変え終え、郭石平が顔をあげた。

女に似た甲高い声が弾んでいるので、小旋風の気持ちも高まった。

「琴です！　絃は、五絃しかありません

が、完璧な形のままなので、音が鳴ります」
「五絃琴だと？　……どこで手に入れた」
郭石平が疑わしげに、革袋に手を伸ばした。
小旋風は琴をひょいと遠ざけた。郭石平の視線が鋭くなったのでおどけてみせる。
「石頭老師もよく知る、丘がたくさんある場所です。琴のようですが絃が少なく、怪しんでおりましたが、五絃琴ってえ呼ぶんですか、さすが老師、物知りだ」
「琴は古来、五絃であったのだ。周の文王と武王が一絃ずつ加え、七絃とした」
郭石平の指が几案を軽やかに叩いた。苛立ちに気づかぬふりで、小旋風は首を傾ける。
「そんなら俺の五絃琴は、琴の元祖ってわけですね？」
再び、郭石平が琴に手を伸ばしたが、小旋風は渡さなかった。
「私が判じてやる。早く見せよ！」
郭石平が掌で几案を叩き、墨が跳ねた。音と粉に小旋風は身を竦めた。そっと表情を窺えば、表情にはありありと、小童に焦らされるなど我慢ならないと書いてある。
準備は上々だ。小旋風は時間をかけて、革袋から琴を取り出した。
「啊啊啊啊……まさか……このような……」
琴を前に、郭石平が痙攣した。
雷を浴びたかのような反応に、小旋風は胸を躍らせたが、郭石平は「啊」を繰り返してびくびく震え続ける。
叩き殺しても死なないような爺だが、ぽっくり逝っても不思議ではない年齢だ。心配になって、郭石平の肩を揺さぶった。
「せっ、老師、あの、……どうしました？」
「ええい煩い。触れるでない！」
一喝とともに突き飛ばされた。祭祀用青銅器に頭を打ちつける。重低音のすこぶる良い響きが室に広がった。視界が揺れる。一瞬、なにもわからなくなる。
疼く頭に呻いていると、騒ぎを聞きつけた使用人たちが現れた。小旋風を見咎めて、何があったのかと詰問する。だが、郭石平が赤く染まった顔で「呼んでおらぬ！」と追い払った。
郭石平は倒れた青銅器にも視線をむけず、居住まいを正すと、絹絃に触れた。
音は連なり、曲となった。古の琴だが演奏に耐えうる。小旋風の視界が潤んだ。猪児の死は無駄ではなかった。
「見る者を虜にする麗しさ……音色までもが素晴らしい。……木製楽器は古いほど良い音がするが、これだけの年代物がなぜ朽ちずに？　いつまで寝ておる、真実を言え。どこで手に入れた」
小旋風はすぐに、経験した通りに話をした。
「銀河の地下宮殿に眠る、生きた女の死体から、頂戴しました」
告げた途端、郭石平の目つきが変わった。
「女の足は、……二本であったか？」
どういう意味かと問いかける前に、畏怖を宿した瞳で「忘れよ」と制された。